島嶼看護高度実践指導者の育成と将来への展望

野口　美和子

沖縄県立看護大学紀要　第12号（2011）別刷

その他

島嶼看護高度実践指導者の育成と将来への展望

野口　美和子
沖縄県立看護大学　学長

１．島嶼看護の海へ漕ぎ出すきっかけ

従来、島の暮らし、島の看護については、相反する評価がされてきた（図1）。　例えば「島の暮らしは乏しく悲しい」に対して、「島が一番美しい、島でずっと暮し

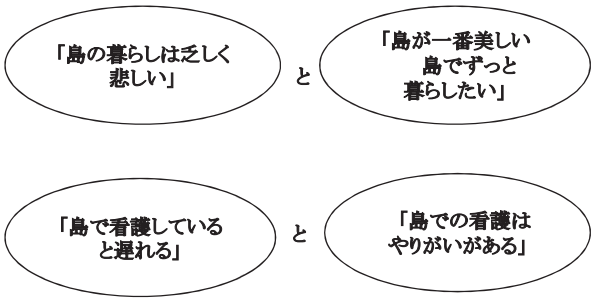

図1　島嶼看護の海へ漕ぎ出すきっかけ（その1）

たい」というものである。又、ずっと「島で看護していると遅れる」進歩から取り残されるに対して、「島での看護はやりがいがある」本当の看護に出会えたといったものである。

沖縄には多くの小離島がある。そして沖縄自体が島なのである（図2）。古来より、琉球列島と呼ばれ太平洋の島々と交流してきた。何よりも、日本国はそもそも島国なのだ。日本のとりわけ沖縄の看護を考えるとき、島嶼看護学の追究、研究はとても大切な課題といえる。

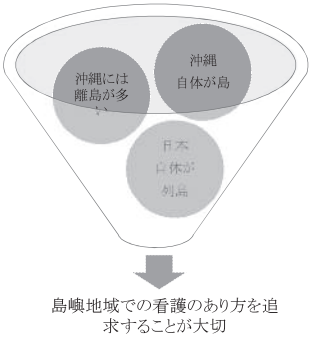

図2　島嶼看護の海へ漕ぎ出すきっかけ（その2）

沖縄県立看護大学は
開設時から島嶼看護学の教育をしている。
島嶼看護の研究も進めている。
しかし
それは十分であったか？

図3　島嶼看護の海へ漕ぎ出すきっかけ（その3）

沖縄県立看護大学は開学のための基本計画においてすでに「島嶼看護」の教育・研究が打ち出され県民に約束されていた（図3）。開学後10余年の間、島嶼保健看護の講義や島嶼での実習が一部に行われており、又様々な教育研究領域で、島の看護に関する研究が行われてきた。しかし、それは十分であったかといえばそうではなく、大学全体として組織的に取組んできたとは言い難いものであった。

２．船出（文部科学省の２つのGPが同時採択）

そこで、平成20年に、2つのGPに応募しそして採択された（図4）。組織的な大学院教育改革推進プログラム「島嶼看護の高度実践指導者の育成」と、質の高い大学教育推進プログラム「島嶼環境を活かして学ぶ保健看護

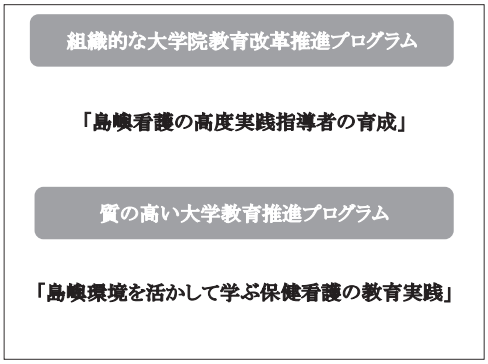

図4　船出（文部科学省の2つのGPが同時採択）

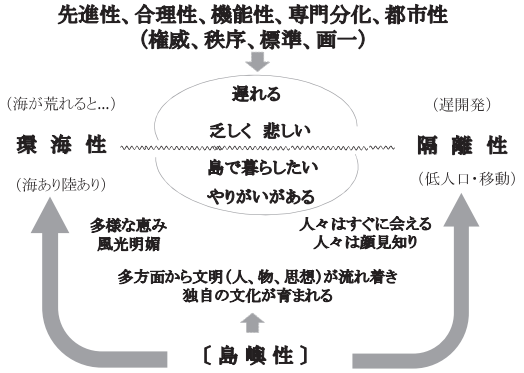

図5　島嶼看護の高度実績指導者の育成計画

の教育実践」である。島国である日本の文部科学省が、小離島を多くかかえる沖縄県の看護大学からの申請を支援するのは当然のこととはいえ、沖縄県立看護大学が、「島嶼看護の海へ沖縄から漕ぎ出す」上で、文部科学省の支援の「追い風」は、とても有り難いものとなった。

3．島嶼看護の高度実践指導者の育成計画

「島嶼」とは地理的用語であると同時に歴史、産業、経済を含む、諸要因に規定される文化的用語でもある（図5）。地理的には「環海性」そして、歴史、文明、文化的には「隔離性」の特性を背負い、そこから「幸」も「不幸」も「便」も「不便」も持たらされている。海、陸からの「多様な恵み」、そして島ならではの明るく、光輝く風景があり、狭ければ狭いほどに「人々はすぐに会える、人々は顔見知り」で深く繋がって暮らしている。四方に広がる海からは海流に乗って「多方面から文明（人、物、思想）が流れ着き」そして隔離された中で「独自の文化が育まれる」という特徴も生まれる。だから人々は、島を愛し、島を誇りに思い「島で暮らしたい」と希望を抱き、希望の実現を支える看護職が「やりがいがある」と思えるのではなかろうか。

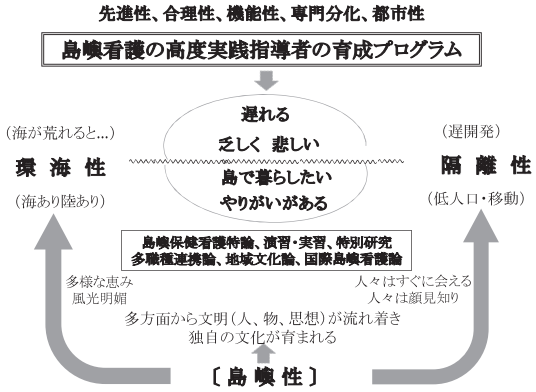

図6　島嶼看護の高度実績指導者の育成計画

一方、グローバル化が進む現代社会の「先進性、合理性、機能性、専門分化、都市性」から見ると、海が荒れ交通の不便な島では、物資、情報に「乏しく」、開発が遅れるために、若者が、病弱なお年寄りが外に出て行き、別れの「悲しい」体験が多くなる。先進医療施設や専門職の数も少なく、何となく置いて行かれ「遅れる」不安を覚える現実もある。

そのような島の暮らしと看護の特徴を踏まえて、島の看護を担いリードする指導者を育成するのが「島嶼看護の高度実践指導者の育成プログラム」（以下大学院GPプログラム）である（図6）。そして、「島嶼保健看護特論、演習・実習、特別研究、多職種連携論、地域文化看護論、国際島嶼看護論」が開講された。

4．実践的看護研究指導を通してみえてきつつある島嶼看護の高度実践

平成21年4月に大学院GPプログラムに入学した大学院生は、講義、演習、実習を終え、今3人が課題研究、博士論文の作成に取りかかっている。まだ仮題ではあるがそのテーマを示す（図7）。修士課程での課題研究「島嶼における保健看護活動の評価のあり方」は、40年にわたる島の保健師の活動、なかでも母子保健活動に焦点をあてて、その発展過程をほりおこしデーターとし、それに“島の看護を発展させたものは何であったか”を問いかけて導き、それを活動評価の視点として後輩保健師に残していこうとするものである。

課題研究「離島診療所における高齢者の内服自己管理への看護師の支援」は高齢者の内服薬の自己管理支援という一見ありふれた看護活動を通して、島での看護の特質を求め、あり方を検討するものである。

博士論文にかかる研究「島嶼地区の中核病院が行う離島支援の看護活動モデルに関する研究」は、大学院GPプログラムのためのサテライト教室を置いている宮古島

- **課題研究（修士）**
  島嶼における保健看護活動の評価のあり方（仮）
- **課題研究（修士）**
  離島診療所における高齢者の内服自己管理への看護師の支援（仮）
- **特別研究Ⅱ（博士）**
  島嶼地区の中核病院が行う離島支援の看護活動モデルに関する研究（仮）

図7　実践的看護研究指導を通して見えてきつつある島嶼看護の高度実践

市にある県立宮古病院が、これまで行ってきた離島支援の諸看護活動を見直し、改革を図るために設けられた委員会に、院生が参加し、その全過程を分析対象として、離島支援の看護のあり方を検討し、モデルを提案する試みである。

これから3人の研究指導をする中で、“これは島の暮らし、島の看護らしいなー”と思われる現象が見えてきている。これを「島の強み、あるいは島の強みを活かすこと」と考えられる現象と、島の弱み、「あるいは島の弱みを克服すること」と考える現象とに分けて検討してみたい。

５．島嶼環境の強みを活かし、弱みを(中和、無毒化し)克服(強みに転じ)する看護実践活動

１）強みを活かす

「島では住民の状況は全て分かってしまう。」（図８）は、「今、息子が帰ってきているから訪問しよう。」、「障害児の妹を兄が連れて遊んでいる。だから、兄の同級生達は障害児との付き合いに慣れているらしいことが見えてくる。」これは障害者のノーマライゼーションを大いに前進させると考える。「精神障害者も、サトウキビの収穫時期は手伝っている。だから、巡回診療にも出てこない。」これはとても良い傾向であると考える。「受診は忘れるが、デイケアへはちゃんと来ているので、そこに呼びに行けば、受診は可能。」や「内服指導をしているつもりが、いつの間にか家の改修や家族の生活指導にまで拡がってしまう。」もある。

「この島で暮らしたい、この島が好きという島の人の気持ちが分かっている。」（図9）は、「重度身体障害児のリハビリが、この島でできなかったために、家族ごと島を離れなければならないことは残念！これをどうにかしたい！！」があり、これが母子保健活動として障害児療育巡回相談をはじめる原点となっていた。

「みんなで助け合ってどうにかしたい。」（図10）は、「役場の職員であれば、救急搬送や台風時に寝たきり老人達のためのそれぞれの世話はすぐにできる」とか、「健診の成果が見えてくると、参加する役場の一般の職員の力の入れ方が違ってくる」もある。こんな気持ちになってしまうのが島なのではなかろうか。

「島ではなんでも言い合える、何でも頼める」（図11）は、「保健師は障害児を持ったことがないから、親の気持ちわからんでしょう」と（面と向かって）言われた。それでハッと我にかえり、いろいろ工夫していけた。「同じ境遇の親が話し合えるとよいと、経験者に初心者のケアを頼んだら、すぐ引き受けてくれた。」、「事務に頼んだら、始めは“仕事が増える”と渋々だったが、成果が見えてくると、“島の子ども達のことだから”と夢

島では住民の状況は全てわかってしまう

・今、息子が帰ってきているから訪問しよう
・障害児の妹を兄が連れて遊んでいる。
だから、兄の同級生達は障害児とのつき合いに
慣れているらしいことがみえてくる
・精神障害者も、サトウキビの収穫時期は手伝っている
だから、巡回診療にも出てこない
・受診は忘れるが、デイケアへはちゃんと来ているので
そこに呼びに行けば、受診は可能
・服薬指導をしているつもりが、いつの間にか家の改修や
家族の生活指導まで拡がってしまう

図8　島嶼環境の強みを活かし、弱みを（中和、無毒化し）克服（強みに転じ）する看護実践活動
強みを活かす（その1）

**この島で暮らしたい、この島が好きという
島の人の気持ちがわかっている**

・重度身体障害児のリハビリが、この島でできなかったために、家族ごと島を離れなければならないことは残念！これをどうにかしたい！！

図9　強みを活かす（その2）

みんなで助け合ってどうにかしたい

・役場の職員であれば、救急搬送や台風時に寝たきり老人達のためのそれぞれの世話はすぐにできる

・健診の成果がみえてくると、参加する役場の一般の職員の力の入れ方が違ってくる

図10　強みを活かす（その3）

島では何でも言い合える、何でも頼める

・「保健師は障害児を持ったことがないから
親の気持ちわからんでしょう」と言われた

・同じ境遇の親が話し合えるとよいと、経験者に
初心者のケアを頼んだら、すぐに引き受けてくれた

・事務に頼んだら、始めは、“仕事が増える”と渋々だったが、成果がみえてくると、“島の子供達のことだから”と
夢中になってやってくれる

・懇親会で三線も弾けば、家族に頼んで
素麺を湯がいてもらう、何でもした
島の子供達のためだもの

図11　強みを活かす（その4）

集まって、食べて、楽しめば、繋がっていく

・集まると必ず山羊汁をつくる、みんな仲良くなる

・母親同士がゆっくり過ごせるように
保健師は昼食の手配をする

・本土の研究者が健診で来た時は、手を替え品を
替えてもてなし、夜も研修会を開き、楽しく学んだ
それが良かったから、飽きさせずに長続きした

図12　強みを活かす（その5）

交通遮断、輸送遮断が頻繁に起こる

・台風がよく来るので、そんな時は、島中の医療施設の
医薬品の在庫を知らせ合ったりして、仲良くなっている

・台風の通過の日数が予測できるので、必要なら在宅酸素
療法患者は入院してもらうので安心して在宅療養ができる

・海の荒れ具合、家族の繁忙などがわかるので、
離島の臨月の妊婦は早めに入院してもらう

・離島検診に行って、台風で研究者とともに1週間も閉じ込
められた。新しい事業計画や研究計画を立て意気投合し、
それで、仲良くなれたし、エンパワーメントされた

図13　弱みを克服する（その1）

専門職がいない

・専門の医師や臨床心理士がいなかったから、
研修で知り合った本土の一流の研究者に頼って、
見事な専門家チームでの一斉検診が実現できた

・一流の専門家に同行訪問しことで、障害児家族指導の
一流のやり方を身につけた

・課題によっては、多少のメンバーの変化はあるものの
ほぼ同じような人が集まってくるので、ツーカーで分担
したり、交代しているうちに、ノウハウを学び合っている

図14　弱みを克服する（その2）

ないものねだりはしないでいるうちに諦めてしまう

・本島から赴任した保健師が訓練を受けずに
放置されている障害者をみて、
「この人達も幼い頃に訓練を受けていたら
もっと豊かに生活できていたはず」という
「外からの目」に触発されたことが、
巡回診療相談を発展させた原動力

図15　弱みを克服する（その3）

中になってやってくれる」、そして「懇親会で三線も弾けば、家族に頼んで素麺を湯がいてもらう、何でもした。島の子ども達のためだもの」という住民が大勢いる。

「集まって、食べて、楽しめば、繋がっていく」(図12)は「集まると必ず山羊汁をつくる、みんな仲良くなる。」、「母親同士がゆっくり過ごせるように、保健師は昼食の手配をする。」これが保健師の大切な仕事だった。

「本土の研究者が健診で来たときは、手を替え品を替えもてなし、夜も研修会を開き、楽しく学んだ。それが良かったから、飽きさせずに長続きした」飽きさせなかっただけでなく、心が通じたようである。

2）弱みを克服する

弱みを克服するでは、島では「交通遮断、輸送遮断が頻繁に起こる」(図13) は、「台風がよく来るので、そんな時は、島にある全ての医療施設の医薬品の在庫を知らせ合ったりして、仲良くなっている」、「台風の通過の日数が予測できるので、必要なら在宅酸素療法患者は入院してもらうので安心して在宅療養ができる」や「海の荒れ具合、家族の頻忙などがわかるので、」離島の臨月の妊婦は早めに入院してもらう。」このような社会的入院というより島的入院も工夫されていた。本土からの研究者と「離島健診に行って、台風で研究者とともに1週間も閉じ込められた。新しい事業計画や研究計画を立て意気投合し、それで、仲良くなれたし、エンパワーメントされた」がある。このように島では、禍を転じて福となすしたたかな態度が形成される。

人口規模が小さい島では各種専門職をそろえることができず「専門職がいない」(図14)、また専門職は都会に偏在する傾向にある。しかしそれを逆手にとって、「専門の医師や臨床心理士がいなかったから、研修で知り合った本土の一流の研究者に頼って、見事な専門家チームでの一斉検診が実現できた。」そして「一流の専門家に同行訪問したことで、障害児家族指導の一流のやり方を身につけた」という。「課題によっては、多少のメンバーの変化はあるもののほぼ同じような人が集まってくるので、ツーカーで分担したり、交代しているうちに、ノウハウを学び合っている。」もある。

「ないものねだりはしないでいるうちに諦めてしまう」(図15) は、「本島から赴任した保健師が訓練を受けずに放置されている障害者をみて、“この人達も幼い頃に訓練を受けていたら、もっと豊かに生活できたはず”という外からの目に触発されたことが、巡回療育相談を発展させた原動力」が述べられている。常に外部に目を向け、新しい動きに関心を持っていることが島の看護指導者には必要なのだ。

「“遅れている”意識を持ちやすい。」では（図16)、

“遅れている”意識を持ちやすい

・保健師が住民と相互信頼関係にあったから
島の住民と本土からの専門家を結びつけたので、
住民はすぐに堂々と研究者と話し合うことができていた

・一流の専門家・研究者達から、自分達がそれまで普通
にやっていたことを注目され、良い評価をされて、
自信を持った

図16　弱みを克服する（その4）

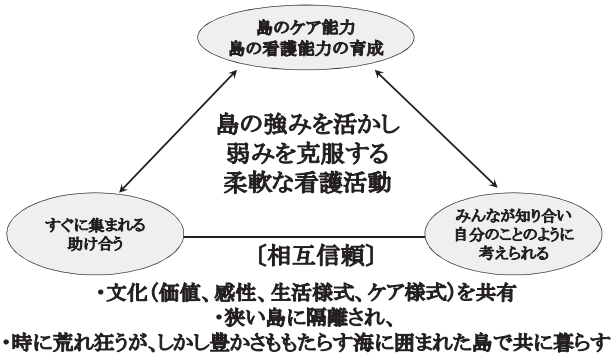

図17　島嶼看護の高度実践

「保健師が住民と相互信頼関係にあったから、島の住民と本土からの専門家を結びつけたので、住民はすぐに堂々と研究者と話し合うことができていた」住民は、始めは東京からの研究者に驚いて腰が引けていたようである。「一流の専門家・研究者達から、自分達がそれまで普通にやっていたことを注目され、良い評価をされて、自信を持った。」もある。これは島の保健師が島の住民全てを良く把握していること、自分の子どものように島の子ども達のことを心配していることに、本土から来た研究者達が感動したことを述べているものである。

６．島嶼看護の高度実践

これら院生の研究指導で見えてきている島の暮らしと看護の特徴を踏まえて、「島嶼看護の高度実践」とは何かを考えてみたい（図17）。

島の住民と看護職は「文化を共有」して「狭い島に隔離」され、「海に囲まれた島で共に暮らす」ことで生まれる「相互信頼」をベースにして、「すぐに集まれる・助け合う」ことを活かし、「みんなが知り合い・自分のことのように考えられる」を武器にして、「島の強みを活かし弱みを克服する柔軟な看護活動」を組織し、「島のケア能力、島の看護能力育成」を達成しているのではないかと推測される。これを検証していきたい。

したがって「島嶼看護の高度実践指導者」は（図18）、

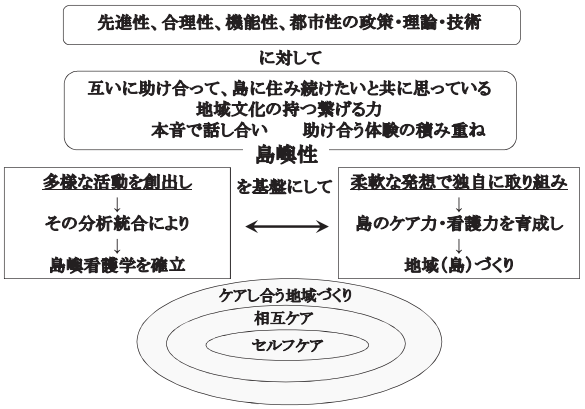

図18　島嶼看護の高度実践指導者

「先進性、合理性、機能性、都市性の政策・理論・技術」に対して、「互いに助け合って、島に住み続けたいと共に思っている地域文化の繋げる力や、本音で話し合い助けあう体験の積み重ね」つまり暮らし方に現れる「島嶼性を基盤にして」「柔軟な発想で独自の取り組み」「島のケア力・看護力を育成し」「地域島づくり」をしつつ、それにより「多様な活動を創出し」「その分析、統合によ　り」「島嶼看護学を確立」することに貢献していくことが求められていると考える。

７．島嶼看護の高度実践指導者の育成を通して

私どもが大学院ＧＰプログラムで目指したものは、沖縄の地、先島において「島嶼看護の高度実践指導者の育成を通して」、「アジア太平洋の島々、世界の島々で働く看護職と学び合い」ながら「島嶼看護学の確立」を目指すことであった（図19）。それは地域看護学への貢献として、その内容を豊かにし、文化看護学への貢献として、島で育まれ、かつ変化する多様な地域文化看護に関する事実を提供する。地域看護学と文化看護学はこれからの21世紀のグローバル化が進む時代において看護の新しい基盤となろう。そして新しい時代の看護教育を開くこと

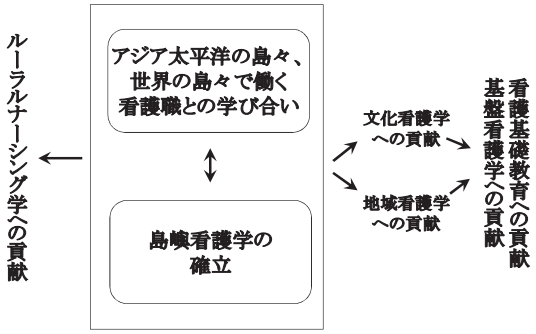

図19　島嶼看護の高度実践指導者の育成を通して

が期待される。関係する看護の学会としては日本ルーラルナーシング学会があり、私どもの研究成果が公表される予定であり「ルーラルナーシング学」への貢献が期待される。

地球が狭くなっている。水が不足している。看護の力によって、島嶼だけでなく、陸の孤島、都会の砂漠も含めて、豊かに人々が暮らす地域であるよう念じたい。